

2012年1月28日（土）マレビトライブ東京編

「N市民 稲光は東京スカイツリーに兄のファルスを見た」

あの夏の拉致事件の後、その年の終わりに緑下稲光は、泉野鏡子から毎週金曜日の4時5分に現れる陽の幽霊のことを教えてもらい、一緒に橋の上の陽を見ることができた。N市は2012年を迎えた。しかし、幽霊ではない実際の陽の行方は依然としてつかめなかった。というより、幽霊になったのなら、もうすでに死んでいるに違いないと確信した稲光は、一刻も早く兄たちの存在を忘れたかった。ここ最近、次兄の次男（つぎお）の声も聞こえなくなっていた。

稲光の歎きは、N市で平穏なバイトの日々をおくり、故郷の父母からの便りも絶え、奇妙な恋人虹見江波とも疎遠になり、絶対的孤独のうちに姉ユミが帰って来ることだけを自分の狭い部屋で待ち望むことであった。その再会のあかつきには、ユミと一緒に稲光の声で録音テープに描写したN市のそれまでの日々の風景を聞きたいと切に願っていた。ユミ姉さんと二人つきりなら、自分の声も恥ずかしくないように思えるのだった。それゆえ、その妄想のかなわない、悶々とした夜に、街の描写の声をそのまま小説として書き写したり、その声につつまれて、自慰行為をしたりもした。

そんなときに東京の友人、野々宮のりりからメールが届く。彼女は高校時代の同級生で、アルバイト生活をしながら演劇の俳優になることをめざし、中央線沿線に住んでいた。その文面の内容を要約すると、こうであった。

「墨田区で、稲光くんのお兄さんの死体が発見されたみたい。お兄さんのファンって人が教えてくれた。2012年1月28日の午後2時に亀戸駅で待っている。」

待っているのが、野々宮のりりなのかそのファンと称する男なのかわからなかった。そして、稲光は、そうか、兄が死んだのであれば、死体もあるのだろう、と思った。はじめてこの世界の事情というものをめんどくさいと感じた。とにかく東京に行かねばならないとは思ったが、墨田区も、亀戸駅も知らなかった。部屋のネット環境が壊滅的だったので、N市の本屋で東京の地図を立ち読みすることにした。